

【マレーシア】母親の養育態度および子育て意識と 子どものレジリエンスとハピネス(QOL)との関連

アミナ・アヨブ¹、陳宝珍²、マズリナ・チェ・ムスタファ¹、イリア・ダヤナ・シャムスディン³、ノ
ラジラワティ・アブドゥラ¹、マサユ・ザイヌディン¹、ノルサイダティナ・チェ・ロズビ³、ノルマ
シタ・モハド・ラジ³

¹ マレーシア スルタン・イドリス教育大学 (UPSI) 国立幼児発達研究所

² マレーシア 公衆衛生専門家、小児科医

³ マレーシア スルタン・イドリス教育大学 (UPSI) 人間発達学部幼児教育科

要旨

本研究は、コロナ禍が子どもたち（5歳と7歳）のクオリティ・オブ・ライフ（QOL）とウェル・ビーイングに及ぼす影響を比較するために、アジア 8 カ国で取り組んでいる国際共同研究の一環としてマレーシアで実施したものである。

本研究の目的: 本研究は、子どものレジリエンスとハピネス（QOL）の状態、母親の子育て意識と養育態度、さらにはこうした母親の養育態度が子どものレジリエンスとハピネス（QOL）に及ぼす影響を調べることを目的とする。

調査方法: 本研究では、共同研究に参加しているアジア 8 カ国のメンバーの意見を参考に CRNA リサーチ事務局が作成したアンケート項目を使用し、オンラインによるアンケート調査を行った。子どものレジリエンスの測定には、カナダのレジリエンス研究所（RRC）が開発した PMK-CYRM-R（児童・青少年のレジリエンス測定尺度（改訂版）：子どものことを最もわかっている者を対象とするアンケート調査）を用いた。一方、子どものハピネスの測定では、ドイツの研究者 Ravens-Sieberer と Bullinger が開発した KINDL-QOL（児童・青少年の健康関連クオリティ・オブ・ライフ調査）の質問項目を採用した（Ravens-Sieberer & Bullinger, 2000）。調査の対象者は 5 歳児および 7 歳児の母親 250 名とした。

分析: 「子どものレジリエンス／ハピネス」に対する「親の養育態度」、「子育て観」、「子育てで力を入れていること」、「配偶者のサポート」の関連性を示す因子を特定するために単回帰分析および重回帰分析を用いた。また、5 歳児と 7 歳児のデータを比較するために独立 2 標本 t 検定を採用した。PMK-CYRM-R と KINDL-QOL、およびその他の変数との相関関係についてはピアソンの相関係数を用い、親の養育態度における潜在的構成概念については因子分析（最尤推定、プロマックス回転、2 因子）と回帰モデルを用いた。

結果: 子どものレジリエンス（平均スコア）は、5 歳児が中程度、7 歳児は高いことがわかった。保護者・養育者レジリエンスは子どものパーソナルレジリエンスと同様の結果となった。子どものハピネスに影響を及ぼす支配因子として、「自己肯定感」、「家族との関

わり」、「友達との関わり」の3つの項目が特定された。また、子どものレジリエンスは2つの年齢グループともハピネス(QOL)と密接な関係にあることが明らかになった。両グループの間にレジリエンスとハピネスの統計的差異はなく、男子と女子の差異も見られなかった。さらに調査の結果、母親の大半は懲罰的・否定的な養育態度よりも肯定的な養育態度であることがわかった。この肯定的な養育態度は子どものレジリエンスやハピネス(QOL)と密接な関係にあり、配偶者のサポートもまた子どものハピネスとクオリティ・オブ・ライフに寄与する重要な要因であることが確認された。

結論: 逆境における子どものレジリエンスとハピネス(QOL)は両親や養育者のウェル・ビーイングに左右される。レジリエンスに影響を及ぼす要因は様々であるが、多くの研究者は親子関係や家族との関わりを重要視している。本稿の最後に今後の研究の方向性を提案する。

はじめに

2年に及ぶ新型コロナウイルスのパンデミックは世界中の人々に恐怖、不安、孤独感、ロックダウンをもたらした。マレーシアも例外ではない。事実、パンデミックはかつてないやり方で人々の生活のあらゆる面を混乱させることになった。家の中に閉じこもることによる精神的苦痛、ソーシャルディスタンス政策による人との物理的な接触の禁止など、あらゆる年齢層の人々がそれぞれ異なる形で経済的かつ精神的に影響を被った。こうした逆境の中、子どもたちはコロナ禍によって最も傷つきやすいグループと考えられている(UNICEF, 2020; 2021)。

マレーシア統計局によると、マレーシアの失業率は2020年の4.5%から2021年には4.8%に上昇している。また、2020年2月に活動制限令(ロックダウン)が導入されてから2021年9月までに、9,015件(以前と比べ20%増)の家庭内暴力が報告されている(The Star紙、2021年9月23日)。子どもたちはこうした長期にわたる危機的状況下、非常に現実的なリスクに晒されており、学校が一時的に閉鎖されたことで事態はさらに深刻化している。親たちは家庭で子どもの生活の時間のやりくりに対し、新たな工夫を強いられている。

このレポートは、コロナ禍におけるマレーシアの子どもたちのレジリエンスとハピネス(QOL)に関する実態調査の結果を報告するものである。この実態調査は、日本で発足されたCRNアジア子ども学研究ネットワーク(CRNA)が計画、後援するアジア8カ国による

共同研究の一環として行われたものである。考察では、コロナ禍という逆境における子どもたちのレジリエンスとハピネス(QOL)の状況や、「親の養育態度」、「子育てで力を入れていること」、「配偶者のサポート」といった要因との関連性に焦点を当てている。

レジリエンスの定義

レジリエンスとは、広義では、逆境において困難に適応し、前向きに立て直そうとする力動的な過程を意味する。ヒトの場合は、安定した生活(ウェル・ビーイング)のために適応的な機能を維持しようとする個人の能力を指す(Ungar 2011, Masten 2014)。本研究では、「子どものレジリエンス」を、コロナ禍における学校/園の閉鎖や政府のロックダウン施策を強いられる状況下、日常の機能やウェル・ビーイングを維持するために家族や社会の支援体制に適応し、利用する能力として定義している。カナダ・レジリエンス研究所の所長であるUngar(2018)によると、支え合う関係、養育者との愛情ある結び付き、効果的な子育てが、子どものレジリエンスを左右する大きな要因となっている。

ハピネスとクオリティ・オブ・ライフ(QOL)の定義

世界保健機関(WHO)は、「ウェル・ビーイング」の状態、すなわち「肉体的、精神的、および社会的にすべて良好な状態」を表す言葉として「クオリティ・オブ・ライフ(QOL)」を使用している。また、UNICEFは、子どものウェル・ビーイングを、「一国の真の現状、すなわち、いかに子どもの健康や安全、物質的な充足度、教育や社会化が保護され、彼らが生まれ育つ家族や社会の中で愛され、価値を認められ、大切にされていると思えるような配慮がなされているかを把握する尺度」と定義している(イノチェンティ・レポートカード7、2007)。この定義は、幼児期における全ての経験が全体的なウェル・ビーイングに貢献すると捉える生態学的アプローチを採用している。広義の意味では、ウェル・ビーイングは、子どもたちの豊かな暮らしを決定する要因、彼らの成長と発達を促進する要因、ハピネスと生活の満足度を向上させる要因を示している。従って、ハピネスとは、子どもが生活や社会環境について非常に満足している状態を意味する。言い換えれば、ハッピーな子どもとは、喜び、興味、自尊心などの肯定的な感情をよく抱き、悲しみ、不安、怒りなどの否定的な感

情をめったに味わうことがない(ただし、皆無とは言えない)と考えられている (Lyubomirsky, Sheldon, & Schkade, 2005)。

本研究の目的

本研究の目的は、コロナ禍における母親の子育て意識や養育態度が子どものレジリエンスやハピネス(QOL)にどのような影響を及ぼしているのかを調べることである。

リサーチ・クエスチョン

1. 2年に及ぶコロナ禍の混乱を経験した後、子どもたちのレジリエンスとハピネス(QOL)はどのような状態であるか？
2. 子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)の間には関連性があるか？
3. 5歳児と7歳児の間にはレジリエンスおよびハピネス(QOL)の差異があるか？
4. 親の養育態度は子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)にどのような影響を及ぼしているか？
5. コロナ禍によって母親の子育て意識や子育て観はどうなったか？
6. 母親が子育てで力を入れていることは子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)にどのような影響を及ぼしているか？
7. 配偶者のサポートは子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)にどのような影響を及ぼしているか？

帰無仮説

- 仮説 1: 子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)には有意な相関関係は存在しない。
- 仮説 2: 5歳児と7歳児の間にはレジリエンスとハピネス(QOL)の有意な差異は存在しない。
- 仮説 3: 親の養育態度は子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)に有意な影響を与えていない。
- 仮説 4: 母親が子育てで力を入れていることは子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)に有意な影響を与えていない。
- 仮説 5: 配偶者のサポートは子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)に有意な影響を与えていない。

調査方法

(i) 調査設計

本調査では、共同研究に参加しているアジア 8 カ国のメンバーの意見を参考にして CRNA リサーチ事務局が作成したアンケート項目を使用し、オンラインによるアンケート調査を行った。アンケートはマレーシアのスルタン・イドリス教育大学(UPSI)に所属している国立幼児発達研究所の専門家が翻訳し、「バックトランスレーション法」(Tyupa, 2011; van de Vijver, 2015; van de Vijver & Hambleton, 1996) およびパイロットテストにより構成概念の妥当性を検証した。オンラインアンケートは、まず少人数の 5 歳児および 7 歳児の母親たちに対して試験的に実施し、彼らのフィードバックに基づき調整を行った。アンケートの最終版は CRNA リサーチ事務局に送付し、検証されている。アンケート調査の所要時間は約 25~30 分とし、母親たちは全ての質問に回答することが求められた。質問項目は、選択回答形式の質問と 4 段階または 5 段階のリッカート尺度を使った質問の組み合わせとした。

幼児教育を担当する全ての州政府機関にアンケートの Google リンクを送付し、それぞれの州の先生全員に転送してもらった。そして先生は 5 歳児および 7 歳児の保護者にアンケートの Google リンクを送付。保護者らは 2021 年 9 月半ばにアンケートに回答している。

(ii) 調査ツール – アンケート

アンケートの質問は 21 の主項目で構成されている。すなわち、子どもの基礎情報(性別、出生順位、兄弟姉妹の数、睡眠時間、登園・登校状況、成績など)、親の基礎情報(学歴、コロナ禍以前と現在の職業など)、家庭の基礎情報(配偶者との家事育児の分担、世帯年収など)、さらには、レジリエンス/ハピネス(QOL)、母親の養育態度、子育て意識、子育てで力を入れていること、配偶者のサポート状況に関する質問などである。

a) 子どものレジリエンス尺度

子どものレジリエンスの測定には、カナダのハリファックスにあるレジリエンス研究所(RRC)¹が開発した PMK-CYRM-R(児童・青少年のレジリエンス測定尺度(改訂版):子どものことを最もよくわかっている者を対象とするアンケート調査)を用いた。この改訂版 CYRM については、英国の研究者 Windle ら(Windle, et al, 2011)が最も優れた精神測定特性・基準であると述べている。PMK-CYRM-R アンケートは 17 項目の質問で構成されており、そのうち 10 項目が子どものパーソナルレジリエンス、7 項目が母親あるいは保護者・養育者レジリエンスに関するものである(McGarrigle & Ungar, 2018)。

PMK-CYRM-R の質問項目は既に世界 20 カ国の言語に翻訳されているが、マレー語の翻訳はまだ無かったため、マレー語版 PMK-CYRM-R の信頼性を現地で評価することになった。その結果、下位項目のパーソナルレジリエンスに関してはクロンバックの α 係数が 0.936(5 歳児)および 0.961(7 歳児)、保護者・養育者レジリエンスに関しては 0.904(5 歳児)および 0.972(7 歳児)と、高水準の数値が得られたことから、マレー語版 PMK-CYRM-R の内部整合性と信頼性は適切であることが確認された。

b) 子どものハピネスの測定

子どものハピネスの測定には、ドイツの研究者 Ravens-Sieberer と Bullinger が開発した KINDL-QOL(児童・青少年の健康関連クオリティ・オブ・ライフ調査)のオリジナルの質問を採用した(Ravens-Sieberer & Bullinger, 2000)。本調査に用いた KINDL-QOL は、リッカ

¹レジリエンス・リサーチ・センター(Resilience Research Center) (2018). CYRM and ARM user manual, Halifax, NS: Resilience Research Centre, Dalhousie University. <http://www.resilienceresearch.org> 参照。

一ト尺度による 24 の主項目および 6 つの下位領域／下位項目（身体的 QOL、心理的 QOL、自尊感情、家族関係の QOL、友達関係の QOL、日常機能）の質問で構成されている。これら 6 つの下位領域／下位項目を組み合わせることにより、ハピネス(QOL)の合計スコアを算定することができる。しかしながら、CRNA リサーチ事務局が 8 カ国のサンプルを用いてクロンバックの α 係数による信頼性分析を行った結果、5、6 カ国は下位項目の「身体的 QOL」と「日常機能」が低水準の α 値を示していることが判明した。従って、本プロジェクトチームの総意として、この 2 つの下位項目を KINDL-QOL アンケートの統計分析からはずすこととなった。残りの 4 つの下位項目については有効なクロンバックの α 値が得られている ($\alpha \Rightarrow 0.1 - \alpha = 0.9$)。

マレーシアに関しては、24 項目合計の合成変数が 0.549 (5 歳児) および 0.792 (7 歳児) となっており、5 歳児に関する KINDL-QOL アンケートの信頼性は低いが、7 歳児に関しては許容可能な水準であることが確認された。しかし、KINDL-QOL アンケートの 3 つの下位項目である「自尊感情」、「家族関係の QOL」、「友達関係の QOL」は、一方または両方の年齢グループで高い α 値が得られた (例えば、「自尊感情」では 0.78 (5 歳児) と 0.87 (7 歳児)、「家族関係の QOL」では 0.92 (5 歳児) と 0.93 (7 歳児)、「友達関係の QOL」では 7 歳児のみが 0.56)。従って、本調査では、これら 3 つの下位項目を総合解析に使用している。

c) 親の養育態度に関する質問項目

アンケートの変数／項目の関連性を調べるために、2 固定因子による最尤推定とプロマックス回転を用いた因子分析を行った。親の養育態度は一般に「肯定的な態度」と「否定的な態度」で言及されるので、2 因子として固定した。KMO 標本妥当性指標では 0.789、バートレットの球面性検定 (Bartlett, 1954; Pallant, 2016) では有意となっていることから、サンプルおよび因子分析の妥当性が確認された。因子 1 は全分散の 33.59%、因子 2 は全分散の 15.49%となっている。因子 1 には肯定的な養育態度に関する 7 項目、因子 2 には否定的な養育態度に関する 3 項目を組み入れた。以下の表 1 は、因子分析の結果を構造行列およびパターン行列で表したものである。

表 1. 構造／パターン行列

Q8:質問項目	因子	構造行列	パターン行列	共通性
1. やりたがることに取り組める環境を用意する	1	0.744	0.744	0.553
2. 何かうまくできたときに一緒に喜ぶ	1	0.742	0.738	0.553
3. 子どもが求めることに応える	1	0.677	0.681	0.461
4. スキンシップをとる	1	0.600	0.600	0.360
5. 何かをやるうとしているときは手を出さずに最後まで見守る(危ない時は除く)	1	0.542	0.548	0.299
6. 興味が広がるような遊びや体験を用意する	1	0.527	0.512	0.312
7. 温かく優しい声で話しかける	1	0.525	0.532	0.283
8. 言うことを聞かないときにたたく	2	0.542	0.542	0.294
9. 何か失敗するときつくせめる	2	0.514	0.523	0.276
10. 感情にまかせてしかる	2	0.456	0.451	0.212

データ分析

「子どものレジリエンス／ハピネス(QOL)」と「親の養育態度」、「子育てで力を入れていること」、「配偶者のサポート」との関連性を示す因子を特定するために単回帰分析および重回帰分析を用いた。また、5歳児と7歳児のデータを比較するために独立2標本t検定を採用した。PMK-CYRM-RとKINDL-QOL、およびその他の変数との相関関係についてはピアソンの相関係数を用い、親の養育態度における潜在的構成概念については因子分析(最尤推定、プロマックス回転、2因子)と回帰モデルを用いた。分析の結果、2つの異なるクラスターが確認された。すなわち、(i)「温かく、応答的かつ寛容的」である肯定的な養育態度と、(ii)「悲観的で、厳しく、懲罰的」である否定的な養育態度。「肯定的な養育態度」に関するクロンバックの α 係数は0.793、「否定的な養育態度」の α 値は0.491であった。欠損データおよび「無回答」は全て分析から除外した。

独立変数であるデモグラフィック要因はレジリエンス(CYRM-R)とハピネス(KINDL-QOL)に関連性のある要因を特定するために組み込んであり、さらに回答者と測定変数の特性を調べるために記述統計を用いた。

本調査におけるデモグラフィックデータ

本調査は5歳と7歳の子どもたちを対象としている。各年齢グループのサンプル合計数は250である。男子と女子の割合はほぼ同じであり、出生順序に関してはサンプルの大多数が第1子または第2子となっている(表2)。

本調査を実施した当時、子どもたちの約60%が「ロックダウン」の状況下で暮らしており、30%が登園／登校しておらず、約70%が遠隔学習(オンライン)プログラムの授業を受けていた。

表 2. 子どもの基礎情報

• 性別	5歳児 (%)	7歳児 (%)
男子	47.2	50.4
女子	52.8	49.6
• 出生順位	5歳児 (%)	7歳児 (%)
1 番目	50.8	43.2
2 番目	25.2	24.0
3 番目	15.6	18.0
4 番目以降	8.4	14.8
• 登園・登校状況	5歳児 (%)	7歳児 (%)
登園／登校している	30.8	26.8
登園／登校とオンライン保育／授業のハイブリッド	66.0	71.2
登園／登校していない	3.2	2.0

母親の学歴に関しては、母親たちの大半が高校卒業者であり、コロナ禍でも正規雇用の仕事に就いていた。ただし、5歳児および7歳児の母親たちの約45~50%は専業主婦であった(表3)。

表 3. 親の基礎情報

最終学歴	5 歳児 (n=250)		7 歳児 (n=250)	
	母親 (%)	配偶者 (%)	母親 (%)	配偶者 (%)
• 義務教育	1.2	2.8	4.0	8.0
• 中等教育	62.8	66.8	59.2	62.0
• 専門学校	18.0	14.0	17.6	11.6
• 高等教育	17.2	13.2	19.2	13.2
• その他	0.8	1.2	0	2.8
• 配偶者はいない	-	2.0	-	2.4
職業	母親 (%)	配偶者 (%)	母親 (%)	配偶者 (%)
• 有職	50.4	88.4	53.2	73.2
• 無職	49.6	7.6	44.0	14.8
• その他	0.0	2.0	2.8	10.0
世帯年収	5 歳児 (%)		7 歳児 (%)	
• 高所得	11.2		14.8	
• 中所得	12.8		16.8	
• 低所得	76.0		68.4	
コロナ以前と比較した場合の世帯年収の変化	5 歳児 (%)		7 歳児 (%)	
• 減少した	35.2		39.6	
• 変わらない	51.6		32.4	
• 増加した	0.0		2.0	
• わからない	13.2		26.0	

世帯年収に関しては、5 歳児および 7 歳児の親たちの大半が低所得層に分類され、45% がコロナ禍によって収入が減少し、50% が変化なしと回答している。一方、親たちの 15% はコロナ禍によって失業し、複数の仕事に就いて家計をやりくりしていることが判明した。

表 4. コロナ禍の状況

ロックダウン政策	5歳児(%)	7歳児(%)
• 有	59.2	58.4
• 無	40.8	41.6
母親のワクチン接種		
• 有	94.0	96.8
• 無	6.0	3.2
コロナ禍における国の対応に対する満足度		
• とても満足している／まあ満足している	80.0	81.2
• どちらでもない	16.0	12.4
• あまり満足していない／まったく満足していない	4.0	6.4
感染拡大に対する不安		
• とても心配している／まあ心配している	99.6	99.6
• どちらでもない	0.0	0.0
• あまり心配していない／まったく心配していない	0.4	0.4

基礎情報を簡単にまとめると、調査対象の子どもたちの大半には多くの兄弟姉妹(平均して3~4人)がいて、親は低学歴、低所得、減収した層に分類される。子どもたちの60%以上は、ロックダウン(活動制限令)が実施されている(マレーシアの)州に住んでおり、学校／幼稚園は閉鎖され、対面授業が行われていない状況にある。従って、子どもたちの大半は教育省が提供するオンライン学習プラットフォームおよびテレビの教育番組を介して授業を受けている。ただし、調査対象の子どもたちの30%は登園／登校していない。母親たちの約80%は国民を守る政府のコロナ対策に満足しているものの、90%は感染拡大について非常に懸念していた。

調査結果

1. 2年に及ぶコロナ禍の混乱を経験した後、子どもたちのレジリエンスとハピネス (QOL)はどのような状態であるか？

(i) コロナ禍における子どものパーソナルレジリエンスの状態

本調査で子どものレジリエンスを測定するために用いた **PMK-CYRM-R** 尺度には、「パーソナルレジリエンス」と「保護者・養育者レジリエンス」という2つの下位項目が設けられている。表5は、子どものパーソナルレジリエンスに関する質問に対する「PMK(子どものことを最もわかっている者=母親)」の回答をまとめたものである。

5歳児の母親の約43%は子どもにはある程度のパーソナルレジリエンスがあることに同意しており、7歳児の母親の69%は子どもには良好なパーソナルレジリエンスがあると答えている。明らかな差異がみられるのは最初の3項目である。7歳児の母親の72%が「周囲の人々と協力することができる」、「異なる状況においてどのようにふるまうべきかを知っている」、または子どもが「教育を受けることや園／学校でうまくやっていくことが重要であると信じている」と回答しているのに対し、5歳児の母親の約16%のみが同じように答えている。

CYRM-ARM マニュアル(RRC, 2018)に従ってパーソナルレジリエンス10項目の平均スコアを合算した結果、5歳児のスコアは25.14、7歳児のスコアは33.7という数値が得られた。従って、5歳児のパーソナルレジリエンスは中程度の水準、7歳児のパーソナルレジリエンスは高い水準にあり、7歳児の方が5歳児よりもコロナ禍の逆境に対するレジリエンスが高いことが判明した。

表 5. PMK-CYRM-R アンケートを用いた子どものパーソナルレジリエンスの評価

質問項目	パーソナルレジリエンス	5 歳児		7 歳児 (%)	
		%	平均	%	平均
Q6-1	子どもは周囲の人々と協力／共有している	16.4%	2.22	72.8%	3.39
Q6-2	子どもは教育を受けることや園／学校でうまくやっていくことが重要であると信じている	16.8%	2.28	72.0%	3.44
Q6-3	子どもは異なる状況においてどのようにふるまい／行動すべきかを知っている	15.2%	2.17	72.4%	3.40
Q6-7	子どもは一緒にいると楽しい、他の子が一緒に遊びたがるような子どもである	56.0%	2.70	71.2%	3.44
Q6-9	子どもは友達に支えられていると感じているようだ	55.2%	2.69	61.6%	3.16
Q6-10	子どもは自分が園／学校に溶け込んでいると感じているようだ	52.8%	2.54	71.2%	3.39
Q6-12	子どもにはつらいときに気にかけてくれる友達がいる	59.2%	2.76	55.6%	3.09
Q6-13	子どもは公平に扱われている	55.6%	2.71	66.0%	3.32
Q6-14	子どもには自分が成長していることや、何事も一人でできることを他者に見せる機会がある	50.4%	2.54	68.8%	3.42
Q6-16	子どもには大きくなったときに役に立つことを学ぶ機会がある	53.6%	2.53	74.0%	3.57
	平均(%、平均スコア)	43.1%	2.51	68.6%	3.36
	10 項目の平均スコアの合計(最低 10、最高 50)	25.14		33.70	
	* パーソナルレジリエンスの水準	中程度		高い	

* レジリエンスのスコア:10-20 = 低い、21-30 = 中程度、31-40 = 高い、41-50 = 優れている

(上記の表にある%値はリッカート尺度の3と5のデータを合算したものである。3の「少しあてはまる」と5の「とてもあてはまる」はマレー語の「setuju」と「sangat setuju」に相当し、回答者が設問に同意する度合いを表している)

(ii) コロナ禍における子どもの保護者・養育者レジリエンス

子どもの保護者・養育者レジリエンスに関しては、子どものパーソナルレジリエンス(表 5)と同じような分析結果となった(表 6)。5 歳児の母親／養育者による7 項目の平均スコアは42%、7 歳児の母親／養育者は77%であった。CYRM-ARM マニュアル(RRC, 2018)に従って分析を行った結果、5 歳児の保護者・養育者レジリエンスは中程度の水準、7 歳児

は高い水準であることが判明した。従って、コロナ禍という逆境に際して7歳児の保護者・養育者レジリエンスは、5歳児のそれよりも高いことが確認された。

表 6. PMK-CYRM-R 尺度を用いた保護者・養育者レジリエンスの評価

質問項目	保護者・養育者レジリエンス [PMK-CYRM-R]	5歳児		7歳児(%)	
		%	平均	%	平均
Q6-4	お子様がどこにいて、大抵の時間、何を しているのかを知っている親/養育者が いる	17.2%	2.22	80.8%	3.56
Q6-5	お子様のことをよく分かっている親/ 養育者がいる	18.0%	2.20	76.8%	3.57
Q6-6	お子様にはお腹が空いたら食べられる ものが十分に家にある	58.0%	2.87	78.8%	3.59
Q6-8	お子様は自分の気持ちについて家族/ 養育者に話す	60.8%	2.95	71.6%	3.48
Q6-11	お子様子どもには気にかけてくれる 家族/養育者がいる	57.6%	2.97	76.4%	3.64
Q6-15	お子様は家族/養育者と一緒にいると 安心するようだ	54.4%	2.62	79.6%	3.76
Q6-17	お子様は、家族/養育者との季節の行 事などの楽しみ方が好きである(祝日 や自分たちの文化について学ぶなど)	30.0%	2.30	77.6%	3.63
	平均(%、平均スコア)	42.3%	2.59	77.4%	3.60
	7項目の平均スコアの合計(最低7、 最高35)	18.14		25.23	
	** 保護者・養育者レジリエンスの 水準	中程度		高い	

** レジリエンスのスコア:7.0-13.5 = 低い、14.0-20.5 = 中程度、21.0-27.5 = 高い、28-35 = 優れている

(上記の表にあるパーセンテージ値はリッカート尺度の3と5のデータを合算したものである。3の「少しあてはまる」と5の「とてもあてはまる」はマレー語の「setuju」と「sangat setuju」に相当し、回答者が設問に同意する度合いを表している)

(iii) コロナ禍における子どものハピネス(QOL)の測定

6つの下位項目がある KINDL-QOL アンケートを用いて子どものハピネスの調査を行ったところ、マレー語版アンケートの信頼性が低いため、3つの下位項目のみを分析対象とした。

表 7. KINDL-QOL 尺度を用いた子どものハピネスの評価

下位項目: 自尊感情		5 歳児	7 歳児
Q7-9	自信があるようだった	53.6%	52.4%
Q7-10	いろいろなことができると感じているようだった	60.0%	40.8%
Q7-11	自分に満足しているようだった	62.0%	49.2%
Q7-12	いいことをいろいろ思いついていた	83.6%	57.2%
平均 (%)		64.8%	49.9%
下位項目: 家族関係の QOL		5 歳児	7 歳児
Q7-13	私たち親とうまくいっていた	88.4%	84.0%
Q7-14	家で気持ちよく過ごしていた	24.4%	83.2%
Q7-15	親子は家でけんかをした	10.0%	8.8%
Q7-16	私に監督されていると感じていた	45.2%	9.6%
平均 (%)		42.0%	46.4%
下位項目: 友達関係の QOL		5 歳児	7 歳児
Q7-17	友達と遊んだ	68.4%	34.0%
Q7-18	他の子どもたちに好かれているようだった	76.0%	66.0%
Q7-19	友達と仲良くしていた	17.2%	69.2%
Q7-20	他の子どもに比べて自分は変わっていると感じているようだった	52.4%	12.0%
平均 (%)		53.5%	45.3%

(* 上記の表にある%値はリッカート尺度の「たいてい」と「いつも」のデータを合算したものであり、母親が設問に同意する度合いを表している)。

表 7 は、子どものハピネス(QOL)に関する 3 つの下位項目に対する 5 歳児と 7 歳児の母親の回答をまとめた平均スコアを表している。例えば、5 歳児の母親の 65% は子どもの自己肯定感が高いと考えているが、7 歳児の母親の場合は 50% のみがそう考えていることがわかった。一方、5 歳児の母親の 42% と 7 歳児の母親の 46.4% のみが、子どもには家族との良好な関わりがあると答えている。

友達関係の QOL については、5 歳児の母親の 53.5% が、子どもには遊び友達が多く、皆と仲良くしていると答えている一方で、7 歳児の母親の 45.3% のみがそのように答えていた。

2. 子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)には関連性があるか?

子どものレジリエンスとハピネス(QOL)の関連性を特定するためにスピアマンの相関分析を用いた。その結果、5歳児および7歳児とも、レジリエンスとハピネス(QOL)の間には有意な正の相関関係があることが確認できた。スピアマンの相関係数は5歳児で $r=0.243^{**}$ ($p<0.01$)、7歳児で $r=0.419^{**}$ ($p<0.01$)となっている。

3. 5歳児と7歳児の間にはレジリエンスとハピネス(QOL)の差異があるか? (マン・ホイットニーのU検定)

マン・ホイットニーのU検定で分析を行ったところ、子どもの年齢によってレジリエンス($U=50236, p<0.01$)とハピネス(QOL) ($U=45579, p<0.01$)に統計的差異が見られた。まずレジリエンスに関しては、7歳児の中央値(326.4)が5歳児の中央値(174.5)よりも高かった。ハピネス(QOL)に関しても、7歳児の中央値(307.8)が5歳児の中央値(193.2)を上回っている。

一方、男子と女子の間でレジリエンスとハピネス(QOL)の差異は見られなかった(U-レジリエンス = 31810.0, $p>0.05$; U-ハピネス(QOL) = 32211.5, $p>0.05$)。レジリエンスに関しては、男子の中央値が248.1、女子の中央値が252.8、ハピネス(QOL)に関しては、男子の中央値が246.49、女子の中央値が254.33と、全体的に似たような数値であった。

4. 親の養育態度は子ども(5歳児/7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)にどのような影響を及ぼしているか?

(i) 親の養育態度と子どものレジリエンス

親の養育態度については、「肯定的(温かく、寛容で応答的)」と「否定的(懲罰的)」の2つの下位項目で分析を行った。表8はこの下位項目で分析した結果を表している。5歳児の母親たちの48.2%、7歳児の母親たちの46.5%が肯定的な養育態度をとっており、両グループとも平均スコアはほぼ同水準であった。一方、5歳児および7歳児の母親たちの

24.3%が否定的な養育態度をとっていることが示された。

表 8. 親の養育態度(Q8)と子どものレジリエンス(Q6)

親の養育態度 (Q8)	5歳児		7歳児		Q8とQ6の相関: パーソナル レジリエンス	Q8とQ6の相関: 保護者・養育者レ ジリエンス	Q8とQ6の相関: 全体的な レジリエンス
	%	平均	%	平均			
肯定的な態度	48.2	3.323	46.5	3.317	$r=0.183^{**}, p<.01$	$r=0.205^{**}, p<.01$	$r=0.189^{**}, p<.01$
否定的な態度	24.3	2.62	24.3	2.43	有意性無し	有意性無し	有意性無し

肯定的な養育態度と全体的なレジリエンスの間には有意な正の相関関係が見られた ($r=0.189, p<0.01$)。また、肯定的な養育態度は、子どものパーソナルレジリエンス ($r=0.183, p<0.01$) と保護者・養育者レジリエンス ($r=0.205, p<0.01$) に対しても、有意な正の相関関係があった。一方、否定的な養育態度と子どものレジリエンスの間には、2つの下位項目も含め、有意な相関関係は見られなかった。

(ii) 親の養育態度と子どものハピネス(QOL)

子どものハピネス(QOL)については、「自尊感情」、「家族関係のQOL」、「友達関係のQOL」の3つの下位項目で分析を行った。

表 9. 親の養育態度(Q8)と子どものハピネス(QOL) (Q7)

Q7: ハピネス測定 (KINDL-QOL)	Q7とQ8の相関: 肯定的な態度	Q7とQ8の相関: 否定的な態度
Q7-1: 自尊感情	$r=0.291^{**}, p<0.01$	$r=-0.066, p>.05$ (有意性無し)
Q7-2: 家族関係のQOL	$r=0.158^{**}, p<0.01$	$r=-0.122^{**}, p<0.01$
Q7-3: 友達関係のQOL	$r=0.131^{**}, p<0.01$	$r=-0.034, p>.05$ (有意性無し)
Q7: 全体	$r=0.241^{**}, p<0.01$	$r=-0.095^*, p<0.05$

分析の結果、肯定的な養育態度と全体的な子どものハピネスの間には、3つの下位項

目を含め、有意な正の相関関係があることがわかった ($p<0.01, r=0.241$)。一方、否定的な養育態度は、下位項目の「家族関係の QOL」 ($r = -0.122^{**}, p<0.01$) および全体的な子どものハピネス ($p<0.05, r = -0.095$) に対して、負の相関関係が見られた。このことから、厳格で懲罰的な養育態度は子どもの家族関係の QOL とハピネス(QOL) にネガティブな影響を及ぼすことが伺われる。

5. コロナ禍によって母親の子育て意識や子育て観は怎么样了か？

母親の子育て意識／子育て観については、「いい親であろうとしている」、「子どもはうまく育っている」、「子育てを楽しんでいる」、「常に子どものそばにいてもよい」、「頼れるものは出来る限り頼るようにしている」、「自分の子どもが他の子どもより劣っていないか気になる」の6つの下位項目で分析を行った。表 10 は、これら下位項目に対する母親の回答をまとめたものである。

表 10. コロナ禍における母親の子育て意識

Q16: 母親の子育て観や意識	5 歳児	7 歳児
1. いい親であろうとして、自分に無理をしていると感じる	16%	56.4%
2. 自分の子どもは結構うまく育っていると思う	18.4%	91.6%
3. 子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ	59.6%	97.6%
4. いつも親と一緒にいなくても愛情をもって育てればいい	40.8%	56.0%
5. 子育てにおいて頼れるものは積極的に頼るようにしている	42.4%	58.0%
6. 自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気になる	31.2%	67.2%

(* 上記の表にある%値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合算したものであり、母親が設問に同意する度合いを表している)

分析の結果、5 歳児の母親たちの 84% は「いい親であろうとして無理をしていない」、59.6% が「子育てを楽しんでいる」と回答していることがわかった。また、「子どもはうまく育っている」と考えている母親はわずか 18.4% であるものの、68.8% は「自分の子どもが他の子どもより劣っていないか気になる」ことはないと回答している。

7 歳児の母親たちに関しては、56.4% が「いい親であろうとして無理をしている」と考えてい

るものの、97.6%が「子育てを楽しんでいる」、91.6%が「子どもはうまく育っている」と回答している。ただし、67.2%は「自分の子どもが他の子どもより劣っていないか気になる」とも答えている。

7歳児の母親の方が5歳児の母親よりも「いい親であろうとして無理をしている」と答える傾向にあるのは、コロナ禍による行動制限令／ロックダウンのために7歳の子どもの家庭で学習させるという責任が重くなったことが原因と思われる。

6. 母親が子育てで力を入れていることは子ども(5歳児／7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)にどのような影響を及ぼしているか？

子育てで力をいれていることに関しては、「社会情動面のスキル」と「社会情動面以外のその他」の2つの下位項目で分析を行った。「社会情動面のスキル」は、(1) 社会のマナーやルール、(2) 基本的な生活習慣、(3) 他者への思いやり、(4) 自分の気持ちや考えを人に伝えるスキルで構成される。「社会情動面以外のその他」は子どもの興味や経験を増やすための様々な習い事や体験を意味する。

表 11 はこれら2つの下位項目に対する母親たちの回答をまとめたものである。5歳児の母親たちの98.4%が社会情動面のスキル、89.3%が社会情動面以外のその他に力を入れていると回答しており、7歳児の母親たちに関しては、97.2%が社会情動面のスキル、90.5%が社会情動面以外のその他に力を入れていると回答している。このことから、これら2つの下位項目に対する母親たちの意識が高いことが確認できた。

表 11. 「子育てで力を入れていること」と「子どものレジリエンス／ハピネス(QOL)」の相関関係

Q17: 子育てで力を入れていること	5歳児	7歳児	Q17とレジリエンス(Q6)／ハピネス-QOL(Q7)の相関関係
<ul style="list-style-type: none"> 社会情動面のスキル 	98.4%	97.2%	Q17 & Q6 - レジリエンス(有意性無し) Q17 & Q7 - ハピネス QOL: $r=0.169^{**}$, $p<0.01$
<ul style="list-style-type: none"> 社会情動面以外のその他((習い事や様々な体験をすることを重視)) 	89.3%	90.5%	

(* 上記の表にある%値は2つのリッカート尺度「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合算したものであり、母親が設問に同意する度合いを表している)

分析の結果、子育てで力を入れていることと子どものレジリエンスとの間には有意な相関関係が見られなかったが($p>0.01$)、子どものハピネス(QOL)との間には有意な正の相関関係が確認された($p<0.01$, $r=0.169$)。

7. 配偶者のサポートは子ども(5歳児／7歳児)のレジリエンスとハピネス(QOL)にどのような影響を及ぼしているか?

配偶者のサポートについては、「育児サポート」と「精神的なサポート」の2つの下位項目で分析を行った。「育児サポート」は、(1)子どもと一緒に遊ぶ、(2)子どもと話をする、(3)子どもに勉強を教える、(4)子どもの世話をすることで構成され、「精神的なサポート」は、(1)家事を分担している、(2)子育ての悩みの相談にのってくれる、(3)子育てや家事、仕事での苦労などを理解してくれる、(4)ストレス発散ができるように配慮してくれる、(5)コロナ流行への対応を一緒に考えてくれることが挙げられる。

分析の結果、5歳児の母親たちの92.4%、7歳児の母親たちの91.5%が配偶者の育児サポートを受けており、5歳児の母親たちの92.3%、7歳児の母親たちの89.7%が精神的なサポートを受けていることがわかった。全体的に、母親たちが育児面および精神面で配偶者のサポートを受けている割合が高いことが確認できた。

しかし、有意な相関関係が見られたのは、育児サポートと子どものハピネス(QOL)との間

のみであった ($p < 0.01$, $r = 0.169$)。

表 12. 「配偶者のサポート」と「子どものレジリエンス／ハピネス」の相関関係

Q19: 配偶者のサポート	5 歳児	7 歳児	Q19 とレジリエンス (Q6) / ハピネス-QOL (Q7) の相関関係
• 育児のサポート (CS)	92.4%	91.5%	CS & Q6: レジリエンス (有意性無し) CS & Q7: ハピネス ($r = 0.169^{**}$, $p < 0.01$)
• 精神面のサポート (ES)	92.3%	89.7%	ES & Q6: レジリエンス (有意性無し) ES & Q7: ハピネス (有意性無し)

(* 上記の表にある%値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合算したものであり、母親が設問に同意する割合を表している)。

考察

本調査は、コロナ禍が子どもたち (5 歳児 / 7 歳児) のレジリエンスとハピネス (QOL) に及ぼす影響を調べ、彼らのレジリエンスとハピネス (QOL) を向上させる要因を特定するために実施したものである。調査の結果、全体的な子どものパーソナルレジリエンスは中程度および高い水準にあり、7 歳児のパーソナルレジリエンスは 5 歳児よりも高く、保護者・養育者レジリエンスは子どものパーソナルレジリエンスの状況を反映する結果となった。これについては、同様の調査結果がイタリアの研究者 Cusinato らによっても報告されている (Cusinato, et al, 2020)。一般的に知られていることであるが、大半の子どもはレジリエンスがあり、逆境に適応するためのリソースや保護因子をもっている。保護因子 (親のサポート) がリスク因子よりも強い場合、子どものレジリエンスも向上する。5 歳児と 7 歳児の分析結果に差異があるのは、5 歳児の母親よりも 7 歳児の母親のほうが育児の経験値が高いことも一因であると思われる。

子どものハピネス (QOL) には多次元の要因が影響しあうが、本調査では「自尊感情」、「家族関係の QOL」、「友達関係の QOL」という 3 つの側面で分析した。その結果、マレーシアの子どもたちの暮らしは全体的に幸福なものであり、子どものハピネス (QOL) は「家族関係の QOL」、「自尊感情」、「友達関係の QOL」と密接なつながりがあることがわかった。これらの要因はロックダウン状況下において子どものハピネス (QOL) を支える役目を果た

している。文化的な観点から見ると、一般にマレーシアの母親たちはしつけに厳しく、子どもを守ろうとする気持ちが強い。これは、子どもが幼い時に規律を教え込むことで、しっかりした価値観をもつ大人に成長すると考えられているため、実際に母親たちは常に心から子どものことを思って行動している。

肯定的な養育態度には、子どもが求めることに応える、やりたがることに取り組める環境を用意する、温かく優しい声で話しかける、スキンシップをとるなどが挙げられるが、こうした親の態度が子どものレジリエンスを促進し、子どものレジリエンスとハピネス(QOL)に大きく寄与していることが明らかになっている。一方、子どもが何か失敗するときつくせめる、感情的に叱るなどの母親の態度は子どものレジリエンスにポジティブな影響を与えることがない(Masten, 2014; Weir, 2017)。こうした結果から、子どものレジリエンスとハピネス(QOL)を促進するあらゆる要因の中でも、親の愛情ある養育態度が最も効果的であることが多く、特にコロナ禍においては極めて重要な要因になると思われる(Diniz, Brandão, Monteiro, & Verissimo, 2021; Mousavi, 2020)。

コロナ禍による自宅隔離およびロックダウン政策は、家庭のウェル・ビーイングに大きな影響を及ぼした。その結果、家庭で育児や教育を行う親の負担が増え、子育てをする能力が試されることになった(Mangiavacchi, et al., 2020)。研究者らはコロナ禍における緊張、不安、争いが家庭のウェル・ビーイングや子どもの行動に及ぼす影響を調査しているが(Coyne, et al., 2020; Cluver, et al., 2020; Wang, et al., 2020)、本調査では、大半の母親たちが配偶者のサポートを受けていること、こうした配偶者のサポートは子どものハピネスに大きく関係していることが明らかになった。この点に関しては、他の研究でもコロナ禍における配偶者のサポートの重要性を論じている(Diniz, et al., 2021; Mousavi, 2020)。

先行研究(Luo, et al., 2020 and Tull, et al., 2020)では、長期にわたるロックダウンが心理的適応の低下に関係していることが論じられているが、本調査の結果によると、子どものレジリエンスとハピネス(QOL)は、愛情ある養育態度と配偶者のサポートがある限り、コロナ禍の影響を受けにくいことが判明した。従って、親との関わりと養育態度は、特に逆境においては、子どもの適応力を促進する重要な要因であると理論づけることができよう。

結論

コロナ禍は予測し得ない不確実な影響をもたらし、子どもたちのウェル・ビーイングを危険に晒している。こうした逆境においても、子どもたちのレジリエンスとハピネス(QOL)は両親や養育者のウェル・ビーイングに大きく左右される。レジリエンスに影響を及ぼす要因は様々であるが、多くの研究が親子関係や家族との関わりが重要な素地であると示唆している。

今後は、地域サービス(地域の施設や社会的支援など)といった他の要因とレジリエンスの関係についても調査することが望ましいと思われる。また、コロナ禍におけるレジリエンスについて長期的な調査を行うことで、そこから得られるデータの中から新たな傾向が見つかる可能性もある。多くの変数は固定的なものではなく、時が経過する間に動的に影響し合い、変化していく。従って、こうした複雑な関連性を読み解くためには、長い時間をかけた調査が必須である。そうすることにより、逆境における子どものレジリエンスやハピネス(QOL)のしくみについて新たなインサイトを得ることができるだろう。

参考文献

- Bartlett, M.S. (1954). A note on the multiplying factors for various chi square approximations. (様々なカイ二乗近似の乗率に関する研究ノート) *Journal of the Royal Statistical Society*, 16, 296-298.
- Cluver, L., Lachman, J. M., Sherr, L., Wessels, I., Krug, E., Rakotomalala, S., Blight, S., Hillis, S., Bachman, G., Green, O., Butchart, A., Tomlinson, M., Ward, C. L., Doubt, J., & McDonald, K. (2020). Parenting in a time of COVID-19. (コロナ禍における子育て) *Lancet*. 2020 Apr 11;395(10231):e64. doi: 10.1016/S0140-6736(20)30736-4. Epub 2020 Mar 25.
- Coyne, L. W., Gould, E. R., Grimaldi, M., Wilson, K. G., Baffuto, G., & Biglan, A. (2020). First things first: Parent psychological flexibility and self-compassion during COVID-19. (大事なことを第一に: コロナ禍における親の精神的柔軟性とセルフ・コンパッション) *Behavior Analysis in Practice*, 2020 May 6;14(4):1092-1098. doi: 10.1007/s40617-020-00435-w. eCollection 2021 Dec.
- Cusinato, M., Iannattone, S., Spoto, A., Poli, M., Moretti, C., Gatta, M., & Miscioscia, M. (2020). Stress, Resilience, and Well-Being in Italian Children and Their Parents during the COVID-19 Pandemic. (コロナ禍におけるイタリアの子どもと親のストレス、レジリエンス、およびウェル・ビーイング) *Int J Environ Res Public Health*. 2020 Nov 10;17(22):8297. doi: 10.3390/ijerph17228297.

- Diniz, E. & Brandão, T. & Monteiro, L. & Verissimo, M. (2021). Parenting and child well-being during the COVID-19 outbreak: The importance of marital adjustment and parental self-efficacy. (コロナ禍における子育てと子どものウェル・ビーイング: 夫婦関係と親の自己効力感の重要性) *Analise Psicologica*. XXXIX. 277-286. 10.14417/ap.1902.
- イノチェンティ・レポートカード 7 (2007). Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries. (先進国における子どもの幸せ: 生活と福祉の総合的評価) ユニセフ・イノチェンティ研究所 ISSN: 1605-7317 ISBN-10: 88-89129-43-3 ISBN-13: 978-88-89129-43-2.
- Luo, M., Guo, L., Yu, M., Jiang, W., & Wang, H. (2020). The psychological and mental impact of coronavirus disease 2019 (COVID-19) on medical staff and general public – A systematic review and meta-analysis. (新型コロナウイルス感染症が医療スタッフや一般大衆に及ぼす心理的・精神的影響: 系統的レビューおよびメタ分析) *Psychiatry Res*. 2020 Sep;291:113190. doi: 10.1016/j.psychres.2020.113190. Epub 2020 Jun 7.
- Lyubomirsky, S., Sheldon, K. M., & Schkade, D. (2005). Pursuing Happiness: The Architecture of Sustainable Change. (幸福の追求: 持続可能な変化のアーキテクチャ) *Review of General Psychology* Copyright 2005 by the Educational Publishing Foundation 2005, Vol. 9, No. 2, 111–131 1089-2680/05/\$12.00 DOI: 10.1037/1089-2680.9.2.111
- Mangiavacchi, L., Piccoli, L., & Pieroni, L. (2021). Fathers matter: Intra-household responsibilities and children's wellbeing during the COVID-19 lockdown in Italy. (父親の問題: イタリアのコロナ禍とロックダウンにおける家庭内の責任分担と子どものウェルビーイング) *Economics & Human Biology*, 42, 101016.
- Masten, A. S. (2015). *Ordinary magic: Resilience in development*. (発達とレジリエンス - 暮らしに宿る魔法の力) Guilford Publications.
- Mousavi SF (2020) Psychological Well-Being, Marital Satisfaction, and Parental Burnout in Iranian Parents: The Effect of Home Quarantine During COVID-19 Outbreaks. (イランの親たちの精神的充足、結婚生活の満足度、および子育てバーンアウト: コロナ禍における自宅隔離の影響) *Front. Psychol*. 11:553880. doi: 10.3389/fpsyg.2020.553880
- Pallant, J. (2016). SPSS survival manual (SPSS サバイバル・マニュアル) (6th ed.). Melbourne: Allen & Unwin.
- Ravens-Sieberer, U., & Bullinger, M. (2000). Manual KINDL-R. (KINDL-R マニュアル) *Hamburg, Germany*.
- Tull, M. T., Edmonds, K. A., Scamaldo, K. M., Richmond, J. R., Rose, J. P., & Gratz, K. L. (2020). Psychological outcomes associated with stay-at-home orders, and the perceived impact of COVID-19 on daily life. (ステイホーム政策に伴う心理的影響と新型コロナが日常生活に及ぼす影響の認識) *Psychiatry Res*. 2020 Jul;289:113098. doi: 10.1016/j.psychres.2020.113098. Epub 2020 May 12.
- Resilience Research Centre (2018). CYRM and ARM user manual. (CYRMとARMのユーザーマニュアル) Halifax, NS: Resilience Research Centre, Dalhousie University. Retrieved from <http://www.resilienceresearch.org>
- Tyupa, S. (2011). A theoretical framework for back-translation as a quality assessment tool. (品質評価ツールとしてのバックトランスレーションに関する理論的枠組み) *New Voices in*

Translation Studies, 7(1), 35-46.

Ungar, Michael. (2018). Systemic resilience: principles and processes for a science of change in contexts of adversity. (体系的なレジリエンス: 逆境における「変化の科学」の原理およびプロセス) *Ecology and Society*. 23. 10.5751/ES-10385-230434.

Ungar, M. (2011). The social ecology of resilience: addressing contextual and cultural ambiguity of a nascent construct. (レジリエンスの社会生態学: 発生概念の文脈的および文化的多義性) *The American journal of orthopsychiatry*, 81 1, 1-17.

Van de Vijver, F., & Hambleton, R. K. (1996). Translating tests. (テストの翻訳) *European psychologist*, 1(2), 89-99.

Van de Vijver, F. (2015). Methodological aspects of cross-cultural research. (異文化研究の方法論的側面) In M. Gelfand, Y. Hong, & C. Y. Chiu (Eds.), *Handbook of advances in culture & psychology* (Vol. 5, pp. 101-160). New York, NY: Oxford University Press.

Wang, G., Zhang, Y., Zhao, J., Zhang, J., & Jiang, F. (2020). Mitigate the effects of home confinement on children during the COVID-19 outbreak. (コロナ禍における自宅隔離政策が子どもたちに及ぼす影響を軽減する) *The Lancet*, 2020 Mar 21;395(10228):945-947. doi: 10.1016/S0140-6736(20)30547-X. Epub 2020 Mar 4.

Weir, K (2017). Maximizing children's resilience. (子どものレジリエンスを最大限に引き出す) *American Psychological Association*, 48(8).

Yoo, J. (2020). Relationships between Korean parents' marital satisfaction, parental satisfaction, and parent-child relationship quality. (韓国の親が抱く結婚や子育ての満足感が親子関係の質に及ぼす影響) *J. Soc. Pers. Relationships*. 37:026540752092146.

Windle, et al. (2011). A methodological review of resilience measurement scales. (レジリエンス測定の方法論的レビュー) *Health and Quality of Life Outcomes*. 2011, 9:8. Doi:10.1186/1477-7525-9-8.

Helliwell, John F., Richard Layard, Jeffrey Sachs, and Jan-Emmanuel De Neve, eds. 2021. *World Happiness Report 2021*. (2021年世界の幸福レポート) New York: Sustainable Development Solutions Network. ISBN 978-1-7348080-1-8

UNICEF (2020). *Annual Report 2020: Responding to COVID-19* (2020年アニュアルレポート: 新型コロナウイルスへの対応) (published 2021). ISBN 978-92-806-5223-9.

別紙

- A. 調査アンケート(マレー語): 5歳児用
- B. 調査アンケート(マレー語): 7歳児用